「わかやま」の未来を考える

藤永　　博

「わかやま」の未来を考える。「わかやま未来学」はそのための授業科目だと思いますが、「『わかやま』の未来を考える」とはどういうことでしょうか。

平仮名表記の「わかやま」の意味については、すでに本特集号のどこかで説明されているはずです。もしかするとその説明の内容とは食い違うかもしれませんが、「わかやま」を考えることは、日本を考えることであり、突き詰めると、世界あるいは人類について考えることだと思います。和歌山県あるいは紀伊半島固有の問題ではなく、世界（人類）共通の問題を定義し、考えるべきです。

それでは、「未来を考える」とはどういうことでしょうか。本稿を書くにあたり、筆者がたどりついた結論は、「未来を考える」とは、現在に目を向け、視野を拡げ、人類が世界で共有できる新しい価値を模索しながら創造し続け、それらがもつ意味を考えることです。そのためには、未来を訝るのではなく、歴史を学び、未来の可能性を信じ、歴史の分岐点である現在のことを考えなければなりません。未来は現在の延長線上にありますが、線はまだ引かれていません。

多くの思想家たちの言葉に影響されてこの結論に至りました。最も強い影響を受けたのはイスラエル生まれの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリです。彼は著書『サピエンス全史（上）・（下）』（柴田裕之（訳）河出書房新書）（SAPIENCE: A Brief History of Humankind, © Yuval Noah Harari, 2011）で、現生人類（ホモ・サピエンス）の「全史」を博引傍証しながら通観しています。

「未来を考える」意味についてもう少し詳しく説明するために、ハラリの歴史観あるいは歴史研究の視点をいくつか紹介します。

> 歴史はどの時点をとっても、分岐点になっている。過去から現在へは一本だけ歴史のたどってきた道があるが、そこからは無数の道が枝分かれし、未来へと続いている。（『サピエンス全史（下）』p.44）

> 歴史は決定論では説明できないし、混沌としているから予想できない。あまりに多くの力が働いており、その相互作用はあまりに複雑なので、それらの力の強さや相互作用の仕方がほんのわずか変化しても、結果に大きな違いが出る。そればかりか、歴史はいわゆる「二次」のカオス系なのだ。（中略）二次のカオス系はそ

れについての予想に反応するので、正確に予想することはけっしてできない。(『サピエンス全史（下)』p.47)

それでは私たちはなぜ歴史を研究するのか？物理学や経済学とは違い、歴史は正確な予想をするための手段ではない。歴史を研究するのは未来を知るためではなく、視野を拡げ、現在の私たちの状況は自然なものでも必然的なものでもなく、したがって私たちの前には、想像しているよりもずっと多くの可能性があることを理解するためなのだ。(『サピエンス全史（下)』p.48)

歴史の選択は人間の利益のためになされるわけではない、･･･（中略)。歴史が歩を進めるにつれて、人類の境遇が必然的に改善されるという証拠はまったくない。人間に有益な文化は何があっても成功して広まり、それほど有益ではない文化は消えるという証拠もない。(『サピエンス全史（下)』p.49)

本稿の「未来を考える」とは、未来の予想を試みることではありません。未来を正確に予測することが困難なこと、予測がその後の事象に影響を及ぼすことは、昨年（2016 年）の米国大統領選挙を見ても明らかです。次期大統領の就任前の言動は憶測を呼び、すでに株価や為替、様々な経済指標が変動を始めました。米国の政権移行の他にも、英国の EU 離脱決定、混迷を極める中東情勢など、未来の不確実性を増大させる要因は枚挙にいとまがありません。

歴史を学んでも、未来の予測には役立ちません。ハラリが指摘しているように、そもそも歴史は「正確な予想」をするための手段ではありません。歴史は分岐点の連続ですが、どこかの時点で「たら」「れば」の思考実験を行えば、他のいかなる選択肢（可能性）も否定できません。その時点での「歴史の選択」に必然性がないことは明らかです。歴史的事象の間に明確な因果関係は存在せず、未来についてもそれが期待できないのであれば、未来の予測は単なる希望的観測あるいは悲観的観測に過ぎません。

「未来を考える」とは、現在に目を向け、視野を拡げ、人類が世界で共有できる新しい価値を模索しながら創造し続け、それらがもつ意味を考えることであると先に述べました。歴史は視野を拡げるため、未来の「不確実性」・「偶然性」を学ぶための教材です。不確実性・偶然性の高い未来のことを心配するより、現在に目を向け、未来に進むことを考えなければなりません。

ハラリは「歴史の選択は人間の利益のためになされるわけではない」「歴史が歩を進めるにつれて、人類の境遇が必然的に改善されるという証拠はまったくな

い」と述べています。おそらく「現在の選択」が世界あるいは人類の利益につながるという保証もないでしょう。現在、行っていることにどのような意味があるのか、何の役に立つのか気になります。

有用性には二種類あるそうです。目的が所与で、その達成に「役に立つ」のが目的遂行型有用性、「役に立つ」ための価値や目的自体を創造するのが価値創造型有用性です(『文系学部廃止の衝撃』吉見俊哉(著)集英社新書)。理工系の知識・スキルには目的遂行型有用性が、人文・社会系の知識・スキルには価値創造型有用性が高いと一般にいわれています。「人文・社会系」は「未来を考える」うえで重要な役割を担います。

「わかやま未来学」と同じ教養教育の「わかやま学」群に配置されている「わかやま海洋体験実習」では、新しい価値の創造につながる海洋体験の機会を提供すべく、授業改善に取り組んでいます。日本では沿岸域における人口や産業の集積が急速に進みました。それに伴い、自然環境の破壊とその影響が深刻な社会問題となり、環境保全や自然再生の必要性が広く認識されるようになりました。このような環境問題に対する価値観は多様です。

「環境創造の思想」では、破壊された自然を再生することは、人間を排除した原生的な自然を取り戻すことではなく、自然環境のポテンシャルと自然の再生能力を尊重し、自然と人間の共存を模索することを意味します(『環境創造の思想』武内和彦(著)東京大学出版会)。また、ここでいう自然と人間の共存は、人間の自然への立ち入りを否定することではなく、健全な人間社会を築くために自然を育成することを意味します。当然、こうした人間中心的な考え方とは全く異なる立場も存在するでしょう。

「人間が環境創造の立場から自然を育成するためには、『自然とはなにか』『人間の関与はどこまでか』といった本質的な問いかけが必要である」と武内氏は指摘しています(前掲書)。答えが一つではない問いですし、環境を創造しながらそれらの問いの答えを探さなければなりません。これが「未来を考える」ということだと思います。

多様な意見(価値観)が存在するとき、議論を戦わせ共通認識を広めて社会を動かしていくことが重要です。しかし、日本人はこうしたことがあまり得意ではないと思われます。そこで求められるのが「市民的教養」です。

日本学術会議の日本の展望委員会・知の創造分科会は平成22年に提言「21世紀の教養と教養教育」を取りまとめ、教養教育の課題を指摘しました。そのなかに「市民的教養の形成」があります。この提言は次のように指摘しています。

> 現代社会において生起し深刻化するさまざまな問題や課題に適切に対応し、その平和的な解決を図っていくには、それらの問題や課題の解決に向けての多様な取り組みに参加・協働する知性・智恵・実践的能力の形成と、それらの多様な取り組みを支え推進する基盤としての市民社会の豊かな展開が重要である。そのためには三つの公共性、すなわち「市民的公共性」「社会的公共性」「本源的公共性：社会的存在としての人間の生存権に関わる公共性」が重要である。

市民的教養はこれら「三つの公共性についての理解を深め、その実現に向けたさまざまな活動やプロジェクトに参加し、連帯・協働していく素養と構え」と定義されています。

この提言は21世紀に期待される教養を「現代世界が経験している諸変化の特性を理解し、突きつけられている問題や課題について考え探究し、それらの問題や課題の解明・解決に取り組んでいくことのできる知性・智恵・実践的能力」としています。さらに、その多面的・重層的な知性・智恵・能力を、学問知、技法知、実践知という三つの知と市民的教養を核とするものとして捉えています。専門教育で修得する三つの知と、教養教育で身につける市民的教養は、それらの形成過程で相互に必要となります。

教養科目「わかやま未来学」では、新しい価値（目的）の創造に資する議論がなされることを期待します。「わかやま未来学」は「未来を考える」ための「市民的教養」を身につける場であってほしいと思います。和歌山県あるいは紀伊半島には新しい価値の芽が数多く存在します。まずはそこに目を向けましょうか・・・